

札幌大学非常勤講師 高橋 理

八幡山遺跡では9世紀の擦文時代の住居が3軒みつかり、そのカマドやそのまわりからは、アワ、キビ、オオムギ(?)などの穀物の種が確認されました(写真1)。このことから、八幡山遺跡の擦文の人々は栽培された穀物類を利用したらしいことがわかりました。



写真1(椿坂 2020)

しかし、穀物を除くとこの遺跡に住んだ人々の食の内容を考える材料がありません。たとえば、北海道の代表的な食べものであるサケやシカなどを積極的に利用していた証拠がみつからないのです。サケやシカは豊富な栄養が摂取できる食べ物であり、日常生活に欠かせない衣類や道具の材料としても最大限に利用されてきたことはよく知られています。しかし、八幡山遺跡ではそのことをうかがうことができません。余市湾ではソイ、メバル、アイナメ、カレイ、カニなど海産物が豊富ですが、それらが食べられていた様子もみられません。八幡山遺跡を残した人々の食を考える上で大きな謎が立ちまわります。

このことを考えるにあたって他の遺跡の例を参照してみます。余市町には擦文時代の住居71軒という大集落がみつかった大川遺跡があります。余市川の河口近くの大川集落には多くの人々が集まっていたと思われます。ところが、その食の献立をうかがうことができる材料は実はごくわずかです。住居の床や炉・カマドなどからみかかった動物はととても少なく、ここからみえる大川遺跡の人々の食資源はニシンやホッケ、カレイ、サケなどがほんの少力で、その食の献立がととても貧弱であることがわかります(表1)。

もう一つ例をあげます。道北の日本海沿岸の留萌郡小平町には、209軒もの擦文時代の住居がみつかった高砂遺跡があります。小平薬川の河口近くのこの遺跡では、わずか2軒の住居のカマドからウグイや海獣類の焼けた骨がごくわずかみつかっただけです(サケの骨がみつかった例も1軒だけのことです)。

大きな河の川口にある擦文時代の集落では、秋から冬にかけてサケを大量に捕獲したといわれてきましたが、大川遺跡や高砂遺跡ではそのサケがごくわずかしか確認されません。

2つの遺跡の擦文の人々はここで何をしていたのでしょうか？

実は大川遺跡では、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、コメなどが大量に出土しました。それらは本州や北方地域からもたらされたものと考えられています。大川遺跡は日本海側の交易の一拠点であり、大量の穀物類は他の地域から搬入され、道内各地に運び出されていたと考えられます。道内の遺跡でみつかるとニシンの骨は、ここから多くの干しニシンが移出されたことを示しているとも考えられています。また、高砂遺跡はサケの大量捕獲場ではなく、石狩川や支流の上流域などで捕獲された大量のサケを移出する流通拠点というとらえ方があります。

擦文時代には、交易を目的として特定の動物資源を過剰に利用する生態系への適応ができあがっていたという考え方があります。道内から移出する特定の動物資源を過剰に捕獲する商業狩猟に本格的に転換し、本州や北方地域との間に活発な交易活動が行われていたというのです。この文脈の中で、大川遺跡や高砂遺跡のように多くの人が集住したにもかかわらず食の息吹が希薄であるという特異な点は、ここは交易の一大拠点であり、日常的な生活を営む場所ではなかったととらえることで理解できるのではないのでしょうか。

八幡山遺跡にもどります。遺跡が臨む登川はかつて余市川に合流し、本流である余市川は現在サケの増殖河川で、多い年には4万尾以上の遡上があります。支流登川にもある程度の遡上はあったと思われます。しかし流路長 14km の登川の上流はすぐに赤井川カルデラの外輪山に迫り、河川の傾斜が大きく狭い谷地形となることからサケの大きな産卵床は想定できず、大量のサケを捕獲する擦文の集落の存在を考えることは困難です。事実、八幡山遺跡から上流域では遺跡の分布は非常に希薄になります。

登川の段丘にごく近く、背後に低位の丘陵がせまる八幡山遺跡の立地は、複数の自然環境が連続的に推移する移行帯（エコトーン）にあたります（写真2）。



写真2

ここでは、生物多様性を背景に多方面の豊かな動植物資源を自給的に消費する縄文時代以来の伝統的な食糧の獲得方法こそが想定されます。つまり、さまざまな動植物が食される条件は整っていたはずですが、八幡山遺跡でみつかった縄文時代の住居からはシカ（と思われる）やイノシシの骨、クルミの殻、柱として利用された木材の一部などが出土していますから、少なくとも動植物の痕跡が残りにくい環境条件を考えることはできません。

ここで、八幡山遺跡の3軒の住居を少し細かくみてみます。カマドで火を焚いた痕跡はあり、焚き口（燃焼部）は強く熱を受けて焼土が厚く残っていましたが、燃料の木材の燃え滓である灰や炭がほとんど残っていません。特に2号住居ではさらに焚き口に土を被せ、その上に大型の土器を逆さまにして立てていました（写真3）。



写真3

カマドの焚き口（燃焼部）の左右には「袖」と呼ぶ部分に石（袖石）が備えられます。2号住居ではその袖石が残されていますが、1号住居では左側の石が抜き取られ、3号住居では石は残っていませんでした。また、どの住居も焚き口の上部（天井）は残っていません。つまりカマドはすべて壊されていたこととなります。さらに3号住居には住居の埋め土にたくさんの焼土や炭化した柱材などがみつかっており、火を放たれて焼け落ちたものと考えられています。調査者の方は、どの住居にも何らかの儀礼的な行為がうかがわれるとしています。

このように、八幡山遺跡の擦文住居はカマドの機能を削がれ、あるいは火を放たれたことがわかりましたが、それが住居を離れる（廃絶）際の儀礼として行われた一連の行為だった可能性があるようです。その際に、カマドの焚き口や炉も丁寧に清掃されたことから、そこに残されていたであろう食の情報も消去されてしまったのかも知れません。

さて、ここでやや不思議なことに気がつきます。それは1・2号住居の土器です。1号住

居では5つの土器が、2号住居ではカマドの焚き口も含めて9つの土器が出土しました。これらの土器の内外面には赤や黒の彩りが残されています。1号住居の南西寄りの床面から一括出土した大型の甕（写真4 a）は人為的に破壊されたものとも考えられますが、その胴部下半に赤彩がみられます。また口縁内面では、口唇から底部に向かって縦方向に数条の赤彩の帯が観察されます（写真4 b）。2号住居のカマドの焚き口に逆さまに立てられていた大型甕には口縁部内外面に黒、胴部下半に赤の彩色がみられます（写真4 c）。さらに、1号住居の近くで出土した紡錘車のほぼ全面に赤色顔料が施されています（写真4 d）。1・2号住居の14点の土器を含め、擦文時代の八幡山遺跡は赤と黒に彩られていたようです。



写真4 a



写真4 b



写真4 c



写真4 d

本州では弥生時代以降、さまざまな儀礼行為にともなう儀礼具として赤や黒に彩色された土器が使われてきたことがわかっています。農耕民による儀礼にこのような彩色が施され非日常的な意味を付与された土器が使われてきました。東京八王子の帝京大学構内でみつけた岩手県地域の9世紀の土器は赤彩土器（赤彩球胴甕）でした。このようにみてくると、八幡山遺跡の擦文人が彩色された土器を使用していた意味は、その食や生業を考える上でけっして小さくないと思われます。

余市町の擦文時代の遺跡は、これまで余市川河口の大川遺跡と入舟遺跡、西側の天内山遺跡と沢町遺跡が知られていました。余市川周辺から大きく東に離れた場所での擦文時代の集落は八幡山遺跡がはじめての例とのこと。その立地を再度みてみると、遺跡は南から北にのびる丘陵の北東端、標高8mほどの緩斜面上に位置し、その北と西側には黒川砂丘までの広い沖積地が広がっています。このような遺跡の立地環境は、海にほど近い標高20～30mの丘陵上に残された天内山遺跡や沢町遺跡とは大きく異なっています。交易の拠点集落だった大川遺跡が海岸や河口に密着しなけりばならなかつたことは前に述べたとおりです。余市川から大きく東に離れ、広い沖積地に臨む低位丘陵の先端に残された八幡山遺跡は、その立地条件という意味からもはじめての検出例となります。そして、そこにある当時の食、生業はやはり農耕であったと考えられます。

「そもそも擦文文化は、7世紀以降、東北北部から道南や道央へ移住した農耕民の文化を在地の人びとが受容し、また移住者と同化して成立したものだ。」（瀬川 2007）との言説を思いおこす必要があるようです。アワ、キビ、オオムギ（？）の出土、住居の廃絶にともなうカマドを清めてから壊すという儀礼行為、赤や黒に彩られた土器などは八幡山遺跡の擦文人が少なくとも畑作農耕民であったことをうかがわせます。それでも、河川にほど近い場所に集落をつくる点は、その一方で動物資源にも依存する必要があったからでしょう。八幡山遺跡が環境移行帯（エコトーン）に立地しているのは、まさにこのことを示していると思われるのです。

八幡山遺跡の擦文人は「複合生業民」（瀬川 2007）と呼ぶべき人々で、「畑作農耕・漁労・狩猟・採集といった生業手段をもって、地域の生態的な環境に応じて補完しあつた生業形態で食料確保（山田 2000）」していたものと考えられます。

謝辞

本資料の作成にあたり遺物の熟覧・写真の使用については、よいち水産博物館浅野館長、小川文化財係長、中塚学芸員に数々の便宜を賜りました。また株式会社シン技術コンサルには、資料作成環境に深いご理解をいただきました。衷心より感謝いたします。

引用文献

- 乾 芳宏 (2010) 『日本海・道央部における擦文文化のニシン漁 大川遺跡の擦文集落と生業をめぐって』余市水産博物館研究報告 第13号 33-43
- 瀬川拓郎 (2007) 『アイヌの歴史 海と宝のノマド』 講談社選書メチエ 401
- 椿坂恭代 (2020) 「余市町八幡山遺跡から出土した植物遺体」『余市町八幡山遺跡』余市町教育委員会 157-160
- 山田悟郎 (2000) 『擦文文化の雑穀農耕』 北海道考古学 第36輯 15-28
- 余市町教育委員会 (2000) 『大川遺跡における考古学的調査 I』

大川遺跡 (1989~1994) 住居出土動植物 (表中-は出土なし)

時期	SH	層位	魚類 (点)	その他動物 (点)	穀物類 (粒)						
					アワ	ヒエ	キビ	ソバ	オオムギ	コムギ	コメ
プレ 7~8C	2	床面	ニシン (椎骨2)・ウグイ (椎骨4)・アイナメ (椎骨1)	-	15	77	22	7			19
	3		-	-	-	-	-	-			-
	4		-	-	-	-	-	-			-
	5		-	-	-	-	-	-			-
	6	床面	ニシン (椎骨1)・ホッケ (椎骨1)・ウグイ (椎骨14)	-	50	2786	669	29			13880
		炉	-	-		11					19
		ピット	-	-	4	420	116	6		4	1102
	13	床面	ニシン (耳骨1)	-	21	1324	219	223	1		4555
		ピット	-	-	8	369	51	69			69
		地床炉	マダラ (上顎骨L1)	-	33	198	364	9			492
62		-	-								
I 8~9C	9	煙道	-	陸獣類 (破片1)							
		床面	-	-			1				1
		カマド	-	-			1				
		炉	-	-							
		ピット	-	-			2				1
	溝	サケ (顎骨片2)	-	6	211	4	61			321	
	19		-	-							
	20	カマド	-	-	6	3	7				
	22	ピット	-	-	1	79	23				
	24	カマド	ホッケ (椎骨1)・ヒラメ (歯1)	-							
	30		-	-							
	33		-	-							
	36	カマド	ニシン (椎骨3)	鳥類 (破片5)							
	49	カマド	ニシン (椎骨1)	鳥類 (破片20)							1
	52	カマド	-	鳥類 (破片7)							
	54	カマド	サケ (歯2)	鳥類 (破片12)							
	71	カマド	ニシン (椎骨3)・ホッケ (椎骨2)・サケ (歯2)	-	1						
		貼床	-	-	1						
	7	床面	-	-	3	9	11				2
		ピット	-	-	1	62	7	2			2
		炉	-	-		1	4				26
8	床面	ホッケ (椎骨1)	-	30	205	2794	427			194	
	溝	-	-		4	2					
	ピット4	ニシン (椎骨1)	-		6	46		1		7	
25		-	-								
18		-	-								
31		-	-								

III 10～12C	38		-	-									
	39		-	-									
	42	カマド	サケ (歯2)		鳥類 (破片2)								1
	43			-	-								
	45			-	-								
	48			-	-								
	51	カマド	ニシン (椎骨12)		-								
	55	カマド	ニシン (椎骨1)		鳥類 (破片21)								
	61	床面	ニシン (椎骨1) ・ ホッケ (椎骨1) ・ サケ (歯2)		鳥類 (破片4)								
	63	カマド	ニシン (椎骨1) ・ サケ (歯2)		鳥類 (破片7)								
	66			-	-								
不明 (擦文)	56	カマド	ニシン (耳骨1)		鳥類 (破片3)								
	67	カマド		-	鳥類 (破片1)								
	14	煙道		-	-		3	1					3
	16	ピット		-	-	4	20	3	5				4
	28			-	-								
	29			-	-								
	46			-	-								
	47			-	-								
	70			-	-								

余市町教育委員会 (2000)、乾 芳宏 (2010) を一部改変